

デラサール大学との国際交流セミナー報告

長島 弘道・長谷川 均

文学部史学地理学科地理・環境専攻

I はしがき

国土館大学とフィリピン・デラサール大学との2007年度の国際交流セミナーが、9月3日から9日まで6泊7日で行なわれた。参加者は、地理・環境専攻学生10名（1年1名、2年5名（内1名は留学生）、3年3名、4年1名）と大学院人文科学研究科修士課程学生1名、教員2名の13名であった。

地理・環境専攻では、3年に一度を目途として海外研修を実施しているが、今回は2001年のフィリピン¹⁾、2004年の台湾（加藤・野口、2004）に次いで3回目にあたる。今回のデラサール大学との交流セミナーにあたっては、当初から前回と同じテーマ、実地見学も同じコースで実施すべく準備を進めた。それは、前回のセミナーの内容が非常に充実しており、現在在籍している学生に対しても十分適応できると判断したからである。ただ、今回はデラサール大学の学生と本学学生とコミュニケーションの機会が増えるように配慮した。

本稿は、セミナーにむけての準備、セミナーの実施状況、学生の感想・評価に関する報告である。

II 事前の準備

2007年度の海外研修の引率・指導者は、2006年10月の教室会議で、長島（人文地理分野）、長谷川（自然地理分野）と決まった。同時に、デラサール大学との交流も承認された。それを受けて実際の準備が開始された。先方との連絡は全て国際交流センターに依頼した。その経過は、以下の如くである。

2006年

12月7日

「平成19年度 国際大学交流セミナー募集について」を入手する。

12月25日

本学国際交流センターを通じて、2007年9月に1週間の予定でデラサール大学でセミナーを実施したいが都合はどうかとの問い合わせのメールを送る。

2007年

1月18日

デラサール大学対外課（International Linkages）レオデル マシランガン氏から受け入れ可能とのメールが入る。

1月22日

訪問期間を9月3日～9日（6泊7日）とすること、期間中のスケジュール案を送付し、都合を聞く。

1月23日

マシランガン氏から調整してみるとの連絡あり。

2月16日

以下の問い合わせをする。①9月3日～9日の日程でよいか、②宿舎としてインターナショナルセンターは使用可能か、③滞在中の輸送手段の確保、④経費について

3月6日

日通旅行から航空運賃の見積もりを取る。日本航空を利用することに決定。

3月8日

国際大学交流セミナー実施計画書を国際交流センター長宛に提出する。

3月24日

国際交流委員会開催

4月20日

国際交流センター長から文学部長宛にデラサール大学との交流セミナーは採択されたとの通知あり。

5月7日

「今年の夏はフィリピンに行きます」との募集ポスターを世田谷、鶴川両校舎同時に掲示する。

6月1日

「フィリピン・デラサール大学との国際交流セミナー参加者募集（費用12～13万円程度）」の掲示をする。

6月16日

参加申込者11名

6月22日

文学部教授会で教員（2名）の海外出張が承認される。

6月28日

デラサール大学から費用の一部について数字が示される。

7月20日

文学部教授会で学生（10名）の海外研修が承認される。

人文科学研究科委員会で修士課程1年学生（1名）の海外研修が承認される。

7月27日

第1回説明会 14：00～16：00、10号館階段教室（全員出席）

(1)①旅行参加申込書、②デラサール大学との国際交流セミナー参加申込書（含む保護者署名・印）、③パスポート写真ページの写しの提出。

(2)日通旅行社から海外旅行について、国際交流センター職員から本学の海外研修の状況およびそれに関する一般的注意事項、三井住友海上火災保険代理店（国土館大学同窓会事務局）から海外旅行保険について、それぞれ説明を受ける。

(3)参加の動機、学生に対するテーマの説明、テーマにそっての課題の提示を行なう。

7月30日

前回示されなかった費用についての連絡あり。

9月1日

第2回説明会 9：00～12：00、10号館階段教室（全員出席）

(1)参加費（12万円）²⁾の徴収、旅行社に航空運賃を支払う。

(2)レポート提出

(3)学生による事前準備の結果とセミナーで特に関心のある事柄についての報告、およびそれに基づいての話し合い。

Ⅲ 国際交流セミナーの実施内容

9月3日（月）

7：30 成田空港集合、9：35、JL741便にて出発、13：05 マニラ、ニノイアキノ国際空港着。入国手続き、両替。14：20 頃、出迎えのマシランガン氏にあう。車2台（1台は荷物）でオーキッド ガーデン スイーツに向う。チェックイン。

マシランガン氏からセミナー期間中の予定表が示される。セミナーは、それにそって実施された。16：50 頃、デラサール大学国際学科（日本語）の3年生3名（男子1名、女子2名）と、近くのハリソンプラザに行く。ここはマニラの商業施設のひとつ。土地の所有者はマニラ動物園、建物および施設の管理運営はハリソン コーポレーションとのことである（後日、マシランガン氏談）。主要な建物の一部は、2階まで吹き抜けになっており、その1階部分には、屋台形式の小さい店が数店並び、チチャロン（豚の皮を揚げたスナック）、飲み物などを売っている（写真1）。

その後、マニラ湾に面したレストランにて夕食と歓談、この時は、2名の学生が加わりデラサール大学の学生は5名であった。

9月4日（火）

セミナー内容：講義と市内見学

(1)講義

デラサール大学図書館オルテガスルームで講義



写真 1

を受ける。

8：00～10：30 「マニラ首都圏の発展と今日の課題」講師 ロサ・カリラン教授(写真2)

10：30～12：00「フィリピンにおけるルーラルツーリズム」講師 Dr. リサリナ・メンドーサ

(2)午後 市内見学(マシランガン氏と学生3名同行)

a. リサールパーク ホセ・リサール記念像

b. サン・アグスティン博物館：サン・アグスティン教会は国内最古の石造教会(着工1587年、竣工1606年)。隣接して古い修道院の建物を利用した博物館がある。

c. カーサ・マニラ：スペイン統治時代の建物

d. サンチアゴ要塞：要塞の一角にリサール記念館がある。

e. SM Mall of Asia：フィリピン最大のショッピングモール。SMデパートを中心にテナントが多数出店している。学生は、約1時間2班(各班にデラサールの学生も加わる)に別れて店内見学。モール内で夕食。

9月5日(水)

セミナー内容：マハイハイ地域でルーラルツーリズムの実態を観察する。

8：30 予定より1時間遅れで出発。マニラから

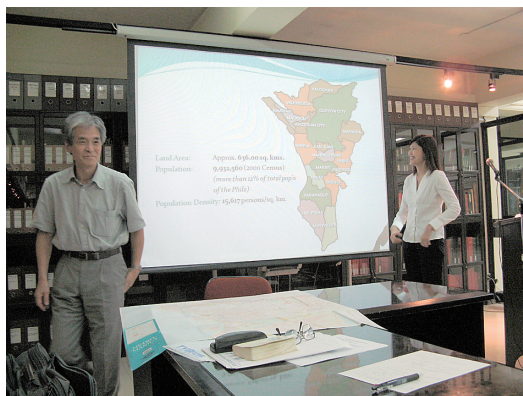


写真 2

高速道路で南下、カランバで地方幹線道路に入る。

(1)カランバ・サンタ・クルスの景観

カランバ(ホセ・リサール生誕の地)を過ぎたあたりから植木、花卉類を栽培しているガーデンの表示が道路の両側に目につくようになる。周辺は水田地帯。

ロス・バニョス(スペイン語で温泉を意味する)は、温泉リゾートでホテルや別荘が多い。「温泉」と漢字で書いた看板があり、ハングルの看板もある。サンタ・クルスから少し東には急流下りで知られたバグサンハンという観光地もあるので、交通量が多い。ロードサイドショップも多い。

(2)マハイハイ・プレア・ヴィル・リゾート(PREA-VILLE Resort) 到着11：30

パンフレットによると名称は、PREA-VILLE FAMILY FARM & TRAINING CENTER、領収書にはPREA-Ville

Experimental Farm & Training Centerとなっている。経営者はPREA DEVELOPMENT CORP. 兄弟7人の協同経営。経営者の話によると、ここは兄弟姉妹で経営するリゾート。PREAとは経営者の両親の名前のイニシャル。面積8000平方メートル。この施設は、当初家族で利用する予定であったが、後にレストラン・宿泊施設として一般に開放するようになった。現在の施設は、レストラン、宿泊施設(100人

収容可)、会議場 (60 名収容可)、催しもの会場 (100 名収容可)、水泳プール、カラオケ・ビリヤード・卓球可能。かつての野菜畑の一部を利用して花、植木等を植えた。敷地の一部には棚田もある。近くの山でトレッキングの可能とのことである。

マハイハイ町長 (Municipal Mayor) を迎えてフォーラムを開催する予定であったが、町長が多忙のため中止になった。後刻、庁舎を訪れ、町長と短い時間ではあったが、面談の機会を得た (写真 3)。

(3) タイタイの滝

プレア リゾートから車でおよそ 25 分くらいのところに滝がある。高さはおよそ 10 メートル位。滝の前にはキャンプをするグループ、テントは 3 ~ 4 張り。滝つぼの前には石を並べて堰が作られていて、そこまでは歩いて行くことができる。そこに 10 名位の観光客。その中の 4 人の若い女性、通常は台湾で仕事をしているが、現在帰国中、マニラに滞在している。今日は、その中の一人がこの近くの出身なので、マニラからバス・日帰りでここにきたとのことであった。別の 2 人連れは、近くの町からきたとのことであった。

男子学生の 2 人は、ズボンをはいたまま滝つぼに入り、ご満悦の様子であった。

(4) リリュウ

マイハイ町長を訪問したあと、隣の町 リリュウで途中下車をした。人口 31000 人、履物の製造業が多い。履物の店が並ぶ商店街を観察。地方町の状況を知る上で極めて有益であった。たまたま、学校帰りのハイスクール (日本の中学と高校 1 年生年代) の生徒と出会う。学生はサインを求められ、いささか照れながらも楽しそうであった。ひとりの女子学生は、女生徒からほほにキスを求められていた。時間にすれば、僅か 15 程度と思われるが、突然現れた微笑ましい国際交流の場であった (Liliw, 2006)。



写真 3

(5) 帰路の交通渋滞

帰路、特にカランバに入るあたりの交通渋滞が激しかった。交通渋滞地帯には、例によって物売りが忙しそうに動いている。マニラ首都圏では、高速道路が整備されてきているが、地方の幹線道路、特に観光地を控えているような地域の道路は混雑がはげしいと思われる。20 : 30 頃ホテル着

9 月 6 日 (木)

セミナーの内容 : 都市近郊農業の観察、マニラマニラ近郊の観光地 タール火山登山

8 : 00 ホテル発。デラサール大学の学生 4 名 (男子 1 名、女子 3 名)、職員 4 名同行

(1) 昨日の同じ高速道路を南下、サント トマスあたりで高速を降りる。別の高速道路 (サント トマスーサンバット間) を利用してタール湖畔へ。途中、それぞれのバランガイ が標識を建てているので、集落が変わったことを知ることができる。露店のあるバランガイもあるが、露店の数はロス バニョスに比較すると少ない。

(2) タール火山

タール火山に登るには、まずタール湖をパンカボートで渡る。この湖はカルデラ湖になっている。その先に島がある。島そのものがタール火山である。1 隻の収容定員が 8 名のため 3 隻が必要になる。デラサールの学生は、タール火山に登るのは全員がはじめてとのことである。



写真 4

所用時間およそ 30 分。島に着くと、馬に乗らないかと激しい勧誘が始まる。登山道は、両側に木があり、風通しの悪い。細い道に勧誘員が馬に乗って入ってくる。馬の数およそ 16 頭くらい。顔のすぐそばを馬が歩く。馬の尻尾が顔にあたることもある。馬は、日本で見る馬より幾分小さい。馬が蹴る気配がないのがせめてもの救いである。こうした状態が、15 分から 20 分位続く。見晴らしがよく、心地よい風が吹いてくるあたりになると、勧誘のシャワーも終わる。標高 300 メートル位のこの山に登る時間は約 40 分。途中で火山研究者の測量隊と出会い、また、登山道の窪みから吹き出す熱気やガスを見ながらの登山であった。斜面を登り切ると眼下にもう一つの小さなカルデラ湖がある。タール火山の頂上は、内側の新しい外輪山の一部に相当する。外輪山から下の湖を見ると、湖岸の数カ所からガスが立ちのぼり、また湖の中に色が変わった部分も見ることができる。

頂上には茶店があり、冷たい飲み物を売っている。韓国からの観光客の中にはハイヒールを履いた女性、4 歳くらいの女の子もいた。

頂上でおおよそ 1 時間ほど休憩して下山、所用時間は 25 分位。眼下にタール湖を見ながらの下山は、登った人にしか分からない快適な時間である（写真 4）。

登山には、料金が必要である。徴収係りの女

性の話によると、入山料の徴収は、この地区のバランガイが行なっている。ガイド（馬を勧める）になるには、バランガイの承認が必要である。現在約 100 名のガイドがいる。ガイドには、いくつかのグループがある。観光客は、観光シーズンが終わった 9 月はウィークデーでおよそ 100 人、週末はその 2～3 倍、観光シーズンの 6 月頃はウィークデーで 300～400 人、週末はその 2～3 倍。海外からの観光客は、最近では韓国が最も多い、次いで台湾、その次が日本とのことであった。

タール湖では、ティラピアを中心として魚の養殖を行なっている。船宿のおばあさんの話では、経営者は中国人とのことである。今回の費用は、船賃と入山料込み 19 人分割引料金で 6750 ペソ（1 人当たり 355 ペソ）であった。

9 月 7 日（金）

セミナーの内容：旧アメリカ海軍スービック基地の開発の現状、ピナツボ火山噴火の影響の観察
8：05 ホテル発。デラサル大学バスを使用、スーツケース持参。デラサル大学の職員 3 名同行＋運転手。バスの後部に "The future begins here" と書かれてある。

(1) マニラ～スービックの景観

バスはマニラ市内を北に向う。木造 2 階建ての古い建物が残っている地区を通過する。かつてのマニラはこのようなものではと思わせるような景観である。車で 50 分ほど走ると、農村地帯に出る。水田が多い。9：40 頃、火山灰泥流（ラハール）に覆われた川にさしかかる。下車して写真を撮る。車窓左側にラハールで建物の大部分が埋まり、屋根とその下の部分が僅かに残っている教会も見える。道路も使用不能になったので新たに建設されたとのことである。

(2) 旧アメリカ海軍スービック基地。1992 年に返還される。スービック湾自由貿易地区 (Subic Bay Free Trade Zone) の面積は、陸



写真 5

地が 53000ha.，海域 14000ha. (写真 5)

現在、この地区は Subic Bay Metropolitan Authority, SBMA) によって管理・運営されている。

地区内には、Subic Bay Industrial Park (製造業 79 社、内 49 社は台湾企業)、Subic Technopark (日本国際協力機構と SBMA によって 1996 年に設立、面積 60ha)、Bataan Techno Park がある。SBMA によって許可された総企業数は、323 社 (2000 年)、操業中 246 社 (中西・小玉・新津、2001)。

その他施設

レストラン、Duty Free Shop、アテネオ大学大学院のサテライトキャンパス、アジア インターナショナル オークション センター (中古建設器機、大型トラック等の販売)、海水浴場、釣り場、ホテルなど

ボランティアで案内をしている人の話によると、地区内には消防、警察、電信電話の機能があり、独自に運営されているとのことである。

(3) マングローブ林とアエタ族の実演

マングローブ林は、あまり広くはない。橋が作られていて、そこから見学するようになっている。地区内では、アエタ族が、竹を使って火をおこすこと、ご飯を炊くこと等ジャングルでの生きる知恵を実演してみせている。マングローブ林とアエタ族の実演その他の入場料は、大人

1 人 20 ペソ。SBMA 関連の事業体が管理している。9 月は、1 日 100 人位の観光客が訪れるとのことである。

9 月 8 日 (土)

セミナーの内容：Duty Free Shop での買い物とピナツボ火山噴火の影響の観察

(1) Duty Free Shop このデューティフリー ショップは、フリー ポート ゾーンへの入場料を払えば、誰でも利用することができる。地区内の書店で、ピナツボ火山噴火に関する書籍を購入する。

Stefan Seits : The Aeta at the Mt. Pinatubo, Philippines, New Day Publishers, 313p, 2004.

Tessa. Soriquez, Ruben Maria LV Soriquez : Mount Pinatubo and the Saga of the Megadike, JADE ASIA GROUP PUBLISHING INC., 142p, 2006.

(2) ピナツボ火山噴火の影響が特に大きかったバコロ、ポラックに向う。途中、河川にそってラハールが流れ込み、川底が上昇、周辺地域への拡大を防ぐために建設されたメガダイク (大堤防) を見る。こうした河川は、天井川になっている。

バコロのサン ギレルモ教会。案内書によると、ここは噴火から 4 年以上たった 1995 年 10 月に泥流で 1 階部分が呑み込まれた。当初、灰の厚さは 12 メートルもあったとのことである。現在は、埋め残された部分が教会として使用されている。隣にある木造の建物には、流されてきたラハールがそのままあり、壁には、災害時の写真が展示されている。教会の前には屋根だけを残した住宅が埋まっている (写真 6)。

(3) デラサル大学対外課主催の夕食会

会場：パン パシフィックホテル 中華レストラン

ベニソン クウ所長他職員全員 (5 名) 出席
学生は、各人がセミナーでもっとも印象に残っ



写真 6

たことを述べる。

期間中対外課職員によって撮影された写真を収めた CD が全員にプレゼントされる（写真 7）。
 (4)デラサール大学関係者の配慮により、夕食会の後デラサール大学の学生と本学学生との歓談の機会が設けられた。デラサール大学の学生 4 名（男子 1 名、女子 3 名）、場所はホテルのロビー、時間は 8：30 から 10：00 まで。教員は、10 時に現れることにして退席した。

9 月 9 日(日) 帰国

10：30 マシランガン氏に空港まで送って頂く。
 途中渋滞もなく、11 時前にニノイ アキノ 国際空港に到着。マシランガン氏と一人ひとり握手をして別れる。JL742 便にて予定通り成田空港着。現地解散。

IV 学生の感想・評価

帰国直後に、メールを使って参加者全員に 10 項目にわたるアンケートをおこなった。アンケートの質問項目と回答は以下のとおりである。生の声として、そのまま掲載した。

1. デラサール大学の教員の講義「マニラ首都圏の発展と今日の都市問題」（ロサ カリラン教授）に関して、次の中からひとつを選び、回答欄に番号を記入して下さい。



写真 7

- ①まったく関心をもてなかった
- ②すこし関心が持てた
- ③大変興味深く聞いた
- ④内容がよく分からなかった
- ⑤その他（ ）

	①	②	③	④	⑤
回答数	0	3	7	1	0

2. 「大変興味深く聞いた」と回答した方に、お尋ねします。関心を持った事項を 3 項目キーワードで記入して下さい（順不同）。

回答

- ・都市人口、交通、ゴミ処理
- ・MMDA、不法占拠、インフラ整備について
- ・車のナンバーによる、交通渋滞の緩和
- ・ゴミ処理機能の不足による、新たなスモークマウンテンの誕生、MMDA の役割
- ・交通渋滞緩和策、人口増加、ゴミ問題
- ・MMDA、人口密集、ゴミ問題（特に河川敷周辺のゴミ）
- ・MMDA、車の規制、MMDA と市長の意見（考え）の違い
- ・マニラメトル、不法占拠者、ゴミの移転の解決方法

3. デラサール大学の教員の講義「フィリピンにおけるアグリツーリズムの現状」(Dr. リサリナ・メンドーサ)に関して、次の中からひとつを選び、回答欄に番号を記入して下さい

- ①まったく関心がもてなかった
- ②すこし関心がもてた
- ③大変興味深く聞いた
- ④内容がよく分からなかった
- ⑤その他 ()

	①	②	③	④	⑤
回答数	0	5	4	2	0

4. 「大変興味深く聞いた」と回答した方に、お尋ねします。関心を持った事項を3項目キーワードで記入して下さい

回答

- ・チョコレートヒル、外人の方がリゾート地を営んでいること、ココビーチ
- ・マングローブ林、フィリピン人の年間の旅行回数
- ・フィリピンの人々の余暇の過ごし方、外国人オーナーが設立(リゾート)、主に外国人がリゾートで観光すること
- ・マニラベイの一角にあるゴミ、棚田、NIPA HOUSE

5. 第2日以降各地を訪れました。その中で最も印象に残った地区、関心をもった地区を下記の地区名の中から3地区を選び、その番号を回答欄に記入して下さい(順不同)。

- ①ハリソン プラザ+マニラ湾
- ②ホセ・リサール記念像、イントラム

- ロス、SM Mall of Asia の見学
- ③マハイハイの PREA-RESORT と滝の見学
- ④タール火山
- ⑤旧スービック基地+マングローブ林(アエタ族)
- ⑥火山灰泥流地帯(ラハール)+メガダイク+サンギレルモ教会
- ⑦その他 ()

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
回答数	3	2	5	8	8	4	0

6. 上記で解答した3地区について、なぜ関心をもったか、20字以内で説明してください。

回答

①マニラ湾で美しい夕日を見ることができたから、
②タール火山では山登りに苦労した分、美しい景色に出会えたから、③マハイハイでは、街の雰囲気がマニラとは異なっていたから。

②モール内は、初めて見るものばかりで驚いた、
④火山は今も活動中で二つのカルデラ湖がある、
⑥火山灰泥流で教会などが埋まっていた驚いた

①マニラ湾の汚染などについて興味があったため、
③アグリツーリズムがうまく実践されているから、
⑤アエタ族のサバイバル技術に興味深かったため

③現地で人気者になってしまって驚いた(笑)、
④あの砂埃と馬糞にはまいった↓帰りに硫黄が噴出しているところを見つけて、気になった、⑥サンギレモ教会に積もった火山灰は圧倒された。こんなにも多くの火山灰が積もるものかと、当時の噴火の規模がすごかったのかと感じた。

④タール湖とタール火山火口とで二重のカルデラ湖が出来ていること、⑤米軍撤退後のスービックの開発の様子、⑥教会の1階部分を埋めるほどのラハール被害

①フィリピンの日常的な買い物をする場所として日本の店と違う雰囲気だった、ストリートチルドレンと初めて遭遇し、衝撃的だった、②古い建築物を見てまわりながら歴史の説明も同時に聞けたので、時代を生に感じることができた。また、SM モールオブアジアが、目にしてきた街の様子とは対照的にとても設備が行き届いてきれいだったから、⑤フィリピンではなくアメリカにいるような整備された環境でありまったく違うことに驚いた。

③きれいな滝の水が下流では汚れていたから、④登山道に硫黄が噴出していたから、⑥ラハールで埋まった教会を見たから

③家族でリゾートを作り、大きくしたこと、⑤スービック内の独自のルール、⑥ラハールの被害の大きさ

③山間部の用水路を見ることができたから、④火口湖を見ることができたから、⑤マングローブ林をみることができたから。

⑥ピナツボ火山被災地域の再開発、⑤米軍の基地として政府はどう再利用するのか

③滝というものを初めてみた。

7. 国際大学交流セミナーは現地を見て学ぶことと同時に学生の交流も重要な要素になっています。あなたは、デラサル大学の学生とどの程度コミュニケーションができたと思っていますか。パーセントで記入して下さい。

	30%	40%	50%	60%	70%	75%	80%	90%	100%
回答数	2	1	1	2	2	1	1	0	1

8. 今回のセミナーについて改善点がありましたら、項目とその理由を書いてください（3項目、各20字程度）。

回答

- もっと現地の学生と交流したかったです。
- 飲み水を購入する機会がもっとあればよかった。
- 語学をもっと習得すべきだった。
- 学生との交流について。交歓会で最後にきちんと挨拶ができなかったのも、そのような場があればよかった。
- デラサールの学生との交流で、積極的に文化など聞くべきであった。
- 講義は、受身の授業になってしまった。
- フィールドワークでは、自分の知識のなさで見て感じるだけになり観光みたいになってしまった
- ホテルの売店は物価が高かったけど、外に買い物に行く機会がたくさんはなかった
- 2～3人のグループで買い物に行くことができればよかった（水など）。
- 1週間は長すぎた。日本語で案内してくれる人が欲しかった。

9. フィリピンに行く前に想像していたことと、一番違ったことはどういうことですか（自由記述、100字以内）。

回答

- 食文化の違いが印象的でした。フィリピンの料理は酸っぱい物や甘い物が多く、スパイシーな物が少ない気がしました。それと、スービックの海と空がとても美しく、マニラとの環境の差に驚きました。

- 今回は研修ということで、行く前までは学習をしに行くつもりだけでいたが、実際行ってみて、デラサールの学生との交流等で楽しむ場もあった。楽しむ時は楽しむ、学ぶ時は学ぶといったようなけじめをつけて7日間を過ごした。
- 想像では、フィリピンはまだ道路整備があまりされてなく、自動車は古いものばかりかと思っていました。しかし、首都と周辺の都市との間には高速道路が通っており、新しい日本車がたくさん行き交っていて驚きました。
- 人々の交通ルールに対する適当さ。追い越し禁止線のところで平気で追い越しはするし2車線の道路に横並び3台の車が走っていたり信号がなかったりしたこと。いつ事故が起こるか心配でした。
- 行くまでは、もっと汚いというか、発展途上であるイメージが強かったのですが、しっかり発展していると感じた。ただ、やはり貧富の差としては日本以上にあると感じた。それは地域によって違っているようであった。あと、驚いたのが、どこの店や資料館などにドアマン（警備員）が常にいることだ。そこは予想外でびっくりした。
- マニラ市内の大通りが、想像よりも清掃が行き届いていて、綺麗だった事。
- フィリピンに行く前の想像では、怖いところだという印象をもっていました。狂犬病の危険性だとか、スリに遭ったりするのではないかとかなり心配していました。現地に行ってみて、確かに、車を降りて一人で歩くのはかなり危ないとは思ったものの、様々なところを見てまわるなかで危険なところというイメージ一辺倒だったのが覆されました。
- 危険なイメージがなくなった一番の理由は、デラサール大学の学生・職員の方々と接したこと。現地の説明を詳しく話して下さったことや、街と一緒に歩いたり、一緒に食事をとったりカタコト英語でもコミュニケーションがとれ

- たことによって、楽しく過ごせたと、おもしろかったことが行く前では想像できませんでした。
- メトロマニラがきれいであったこと。想像以上に物乞いと出くわした事。都市と農村の差が激しかったこと。ラハール被害地域での植生の回復具合。
 - 物価の違い。ここまで違うとは思っていなかった。日給、月収の話を聞き、自分達がどれほど恵まれているかを知った。本で読んだりした知識だけではなく現地に行くことによって、より鮮明に感じる事が出来た。
 - この時期のフィリピンは雨期と聞いていたのですが、スコールにあうかと思っていたが、好天に恵まれたこと。前回の台湾巡検では連日悪天候だったので、よかったと思う。
 - フィリピンにいく前にいろいろなことを聞いた。政治混乱、危険、ゴミなど。行ってみたらそれほどでもなかった。

10. あなたは、今回のセミナーを評価するとしたら、どのような評価をしますか。次の10段階の中から選んで回答欄に番号を記入して下さい（最もよい=10）。

1、2、3、4、5、6、7、8、9、10

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
回答数	0	0	0	0	0	0	2	1	5	3

参加した学生の評価は概ね高いが、事前の準備、事前学習などの不足を痛感したという内容の回答があり、また同様の発言を個別に語る学生もいた。引率した私たちも、事前の調整に多大な労力を要したので、この点での学生ケアが十分ではなかったという印象を持ったまま研修を迎えてしまったという点に関しては反省しなければならない。

V まとめ

今回のセミナーも、2001 年同様、講義と現地視察で構成した。マニラ首都圏の都市発展と今日の都市問題に関して、ロサ・カミラン教授は、マニラ首都圏の概要、MMC (Metro Manila Commission、マニラ首都圏委員会) の設立、MMDA (Metro Manila Development Authority、マニラ首都圏開発庁) への組織の変更、開発課題、MMDA と各自治体の長との意見の違いなどを中心にして、パワーポイントを用いて講義をされた。フィリピンにおけるアグリツーリズム (ルーラルツーリズム) について、Dr. リサリナ・メンドーサは、アグリツーリズムの現状についてフィリピン各地の状況をパワーポイントを用いて講義をされた。この中で、デンマークの人がフィリピンの女性と結婚、土地を購入し、宿泊施設を建設して、トレッキングコースを設けているとの事例も紹介され、ルーラルツーリズムの一端を知ることができた。

現地視察は、ほぼ前回と同じコースで実施された。マハイハイへのコースは、途中ロスバニョスという温泉観光地を垣間見ることができた。タール火山は、マニラ近郊の観光地としてよく知られており、フィリピンの観光地を理解するうえで有効である。「馬に乗って登山をしないか」とのガイドの勧誘のシャワーも観光地のひとつの現実である。ピナツボ火山の噴火の影響が現在どのようになっているかについては、多くの学生が関心を持っていた。第 6 日に訪れたバコロのサン・ギレルモ教会は、建物の 1 階部分が殆ど埋まっており、火山泥流の被害の大きさを実感させられた。

今回のセミナーで印象に残ったこと、関心を持ったことをアンケートの際に、キーワード方式で求めたところ、MMDA、ゴミ問題、家族でリゾートをつくり大きくしたこと、スービック内の独自のルール、ラハールに埋った教会などの記述があった。こうしたキーワードを手がかりに、マニラ首

都圏における "Civil Society Organizations" の設立と活動内容、地方の自治体におけるリゾートへの関心、スービック地区の開発と自然保護、ピナツボ火山噴火に伴う火山泥流地帯の復興の現状と課題などに関心の幅を広げることも可能である。参加した学生が、こうした課題について関心を持続することを期待したい。

今回のセミナーを企画するにあたっては、学生間の交流の機会を多く設けたいと考えていた。このことに関しては、あらかじめ先方の担当者にも依頼をしておいた。先方の担当者の配慮により、初日の市内見学、第 2 日のイントラムロス見学、第 4 日のタール火山登山、第 6 日の歓談等に 3 名ないし 4 名の学生の参加を得た。学生たちは、極めて活発に会話をしているようにみえた。しかし、どの程度コミュニケーションができたかとのアンケートの設問に対する回答では、100% 1 名、80% 1 名、70~75% 3 名、60% 2 名、50%、40%、各 1 名、30% 2 名 (平均 60%) とかなりの差が見られた。

殆どの学生にとって海外研修は今回がはじめてである。これを契機に、今後大いなる発展を期待したい。

注

- 1) : 日本国際教育教会が実施している「平成 13 年度国際大学交流セミナー」において、本学 (地理学専攻) から応募したデラサール大学との交流事業 (日本への受け入れ) が採択された。それに先立ちフィリピンを訪問してデラサール大学との交流セミナーが企画・実施された。参加学生 10 名、教員 2 名。

磯谷達宏：フィリピン・ルソン島南西部の農村景観、今月の地理写真、2001 年 12 月、国土館大学地理・環境専攻ホームページ。

磯谷達宏：フィリピンの別世界・スービック地区

の景観，今月の地理写真，2003 年 2 月，
国土館大学地理・環境専攻ホームページ．

2)：現地視察には、大学のバスを使用したこと、
適正な価格のホテルを紹介して頂くなど先
方の配慮により経費が軽減されたので、最
終的には参加者に 1 万円が返金された。

文献

加藤幸治・野口泰生（2004）：2004 年国際大学
交流セミナー（中国文化大学）に関する報国と
覚書，国土館大学地理学報告，No.13，29－46.
中西徹・小玉徹・新津晃一編（2001）：アジアの
大都市 4 マニラ，日本評論社.
Municipal Government of Liliw（2006）：
Brief Historical Background of Liliw.

謝辞

今回のセミナーの実施にあたっては国土館大学
国際交流センターおよびデラサール大学対外課の
多大な支援を得た。特に両者の窓口を担当して頂
いた島崎弓子氏、レオデル マシランガン氏には、
セミナー企画の段階から実施に至るまで継続的に
ご支援を頂いた。ここに深甚なる感謝の意を表し
たい。